博物館アラカルト⑬

女侠阿雪伝

阿雪画像

黄葉夕陽文庫の「女侠阿雪伝」は、梁田蛻巌の「贈尼祥奎二首」、阿雪の和歌二首、中井藍江の「阿雪肖像画」、長田鶴夫の書、山陽の「阿雪伝」、篠崎小竹の「書阿雪伝後」、楊棗蘆楫の「正慶伝」、後藤松陰「侠女阿雪詩」など八作品を巻子に仕立てたものです。頼山陽が文政七年（1824）閏八月二十九日付の茶山にあてた書状のなかで、「阿雪伝、久々御命ニ而、右之仕合ニ而、此節纔得締搆、篠崎などニも相談仕候而、先脱稿之処、浄録乞政候、思召ニ不相協処被下、裁定之上、何ニなりとも如命浄書仕、可差上候。」と述べていて、そのころ製作されたものと思われます。

阿雪（1727～1803）については、諸説があり詳細については明らかではありませんが、大坂の長堀（西区）の平野屋の娘として生まれ、幼くして、薬種問屋の木津屋の養女となりました。阿雪は任侠を好み、家業である薬種問屋より、書画や剣術などを好み、柔を習ったりもしたようです。さらに書画は、大和郡山藩の家老・柳沢淇園に学び、浪速の博物学者・木村蒹葭堂たちと、早くから親しく交わっていました。

彼女が十六歳の頃、簪を盗もうとした輩を打ち倒したことがありました。こうした武勇伝が広まり、在命中にもかかわらず通称「奴の小万」として歌舞伎などに主人公として取り上げられる程、大坂では有名になりました。阿雪の肖像については、こうした脚色された芝居の影響があるようですが、奴髻に尺八を腰に挿した姿は、当時の流行で、ファッションリーダーでもあったのです。

阿雪はその後、京へ出て宮仕えしたのち、二十八歳の頃落飾して、三好長慶の末裔と称して、三好正慶尼と名乗ります。幕府成立以前の戦国大名にその祖先を求めるのは、侠客として権力へのささやかな抵抗の意味があったのです。落飾後も、天王寺の月江寺での御開帳の際、にわか雨で参詣人が困っているのを見た正慶尼は、傘一千本を買って参詣者に与えたといわれており、侠客ぶりを発揮しています。

菅茶山が、なぜ阿雪に関心を寄せたのかはわかりませんが、山陽は「茶山先生、梁蛻巌の阿雪に贈る詩稿を得、之を珍として余をして之が伝を為らしむる。」と記しています。梁田蛻巌が三好正慶尼に贈った詩稿を茶山が、手に入れたからだということです。それが巻頭に収められている「僧尼祥奎二首」で、梁田蛻巌八十四歳、宝暦五年（1755）の作です。丁度阿雪が落飾した頃にあたります。山陽の「阿雪伝」には、「阿雪が芝居に取り上げられ、奴の小万となり、本来の姿から遠ざかり、今では、人に媚をうる歌伎と同じように見られている。」と阿雪が本来の実像とかけ離れていることを感じています。だからこそ、茶山は梁田蛻巌の詩稿からそれを読み取り、正しく伝える必要を感じていたのかもしれません。

（主任学芸員　岡野将士）